生き物[16]がいた。 4:7 第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。 4:8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」 4:9 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、 4:10 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。 4:11 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」[17]

＜おわりに＞

シラーの原詩にも言えることですが、この歌詞は聖書のおしえに基づいています。聖書では、キリストを救い主と信じることで、人間は生まれ変わり神の子どもとなる。そのことを救われると言いますが、救われた人々は、神の家族となり、そこに真の友愛が生まれることを教えています。それが地上界の友愛です。「神の喜びの理想」とは天国のことと解されます。地上界の対立を越えた友愛で結ばれた友の輪は、聖書教える天国で神を賛美し、神の恵みのもと平和に喜びをもって暮らすという理想の世界を見ていることが歓喜として歌われているのです。

シラーの詩は複合的な含意を持ち、いろいろな解釈が出来ると思いますが、全体的には、旧約聖書・新約聖書の世界が描かれています。したがって、聖書の基本的な教えを少しでも理解したうえでこの曲を歌う時、より豊かな喜びを得ることができると思います。シラーやベートーベンが見た夢は確かに、神が見せてくださった夢とも言うことができるかもしれませんし、神が与えて下さる天上の賛美を地上で歌いあげる喜びを神が与えて下さっているともいえます。

---

16 神によって造られた特別な生き物が絶えず神を礼拝し賛美している。ケルビムという解釈もある。これらの生き物は、いのちの中で最も高貴なもの、最も強いもの、最も賢いもの、最も速いものを表しているとも解されている。

17 神は＜栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方＞方です。我々が神を賛美し、礼拝をささげるのは、神こそそれらを受けるのにふさわしいからです。なぜなら栄光は本来神のものだからです。万物が創造され、また存在するのは神のみこころのゆえです。あらゆるものは決して偶然に存在しているのではなく、神の意志ゆえに存在しているのです。この神を離れて、われわれは自分の真の存在意義を見出すことはできないことを聖書から知ることができます。